
-歴史の改編者-

妄想男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- 歴史の改編者 -

【Nコード】

N6463U

【作者名】

妄想男

【あらすじ】

作者の妄想を元に展開する独自設定の作品です。

原作を好きな方には不満多き作品と思われるので、「別の物」と捉えてお読み下さい。

ガンダムシリーズの「1年戦争」を元に書いた、主人公最強系転生チート物です。

原作や登場する兵器類の設定が独自設定に変更等がありますのでご容赦を…。

間違いや誤字・脱字の指摘は勿論、意見等もお待ちしております！

この作品の設定を載せた「-独自設定-」は変更次第、新規掲載（入れ替え？）をします。

ただ、ネタバレがあったり変更になったりしますので、参考や予定程度と考えてご了承頂きます！

更新は月1（毎月15日のみの更新）予定ですので、亀更新がベスになります。

年齢制限は無しですが、残酷な描写はするつもりなのでとりえず最低限の意味で「R-15」を…。

程度は不明ですが、性的描写もリアリティーを追求したいのですつもりです。

その場合、法規等で運営に責任が及ばない様に、年齢制限はとりあえずは変えるつもりはありませんが運営から注意等が来た場合は「R-18」に変更します。

ただ、最初は年齢制限は変えずにワードとこの場で注意及び警告をします。

「注意及び警告」：この作品には残酷な描写・性的な描写が含まれる可能性がありますので、お読みになる際は自己責任でお願い致します。

「R-〇」の条件に入る方はお読みになる事を注意及び警告します。

前記した通り、万が一にお読みになった方がいた場合、及び登場する地名や人名等は作者が考えた設定や原作からの設定を使用しただけですので運営には責任が無い物とします。
又、人名や地名等の多くの設定は架空の物なのでこれによる責任は運営・作者に責任が無い物とします。

それに合わせ、この作品の基本的な設定は原作から来ていますが、関係事態はありますので、当然原作やその関係にも責任がありますので、お読みになるのは自己責任とします。

設定等の説明は変更・更新する可能性がありますので、その説明がある前書き部分に加筆・変更日を記載します。

タイトルを変更。

あらすじを説明用に変更しました。(2011/7/12)

(あらすじでの内容は今後も変化する予定です同年7/12)

・独自設定・（前書き）

2011/7/12作成・掲載

- 独自設定 -

- M Sを始め、兵器類の登場時期や設定が変更されているのがあります。
-

例としては

ドラッツェがジオンと協力開発して民間企業の護衛機として販売しているM S。

これにより本来の登場時期より早く登場し、更に扱いや生産数も違う。

地球連邦軍が開発したボール系を、ジオンとの協力開発したドラッツェもですが地球連邦はM Sの普及と共にその利権を「ネオン独立国」に譲渡、と変更。

他にはM S等の民間に販売された事から、犯罪率が増加。

(宇宙海賊化等)

譲渡の理由は「ネオン独立国」の戦力弱体化を狙った物ですが、裏目に出た設定です。

因みに、宇宙海賊の中には当然、他の反連邦組織も含まれます。

- 勢力図 -

地球連邦は当然ですが、この作品ではジオン公国(てかザビ家)も独立を無事、果たして残っています。

(一部、ジオンから離れた人物はいますが)

他の勢力としては、L5を起点にしたS1・4を支配領土した「ネオン独立国」。

ラグラージュポイント
MSや艦等が民間向けに販売された事によって装備を強化した反連邦組織、傭兵（企業、組織、個人…等）、犯罪組織（宇宙海賊等）…等ですかね？

他には地球で（脱退等で）独立したオーストリア国、ハワイ…等です。

- MSの扱い -

これに関しては最初に記載した通り、公式・非公式問わず、設定を
が変更したされたのがありますので、ご容赦下さい。

- アムロ親子等に関して -

この作品ではサイド6もジオンの支配下に入るので、中立コロニーはL3付近のサイド7・8の2つを最初の中立コロニーにしました。

ただ、それだと色々…特に「V作戦」関係がハチャメチャになりますので、サイド6からは残念ながら戦争を嫌う居住者が多い、と言う設定で制圧したジオン公国に抗議が殺到、仕方なくジオン公国はゴースト等との関係上、サイド6はやや遅れて中立を達成、それ以外は原作と同じく「V作戦」発祥の地、となります。

（発祥の地ってのはおかしいですかね？）

プロローグ

おっす、唐突だけど俺は死んだ。

えっ？

今、話してるだろ？

チツチツチツ、これは神様？って奴に転生させて貰ったんだよ。

何でも間違って殺したらしいから、ちょっと整形してあげたらお礼に転生させてくれるってさ！

場所？

…死亡フラグ満載の「機動戦士ガンダム」の世界だってよ。

まあ、何か他にも転生した奴がいるらしいが、俺は別の時空？らしいから、居ないらしい。

まあ、どちらにしる自由にさせて貰うぜ！

そいつの出したってか貰った力は判らないけど（教え無い約束らしくてな）、俺も幾つかの力・チート・を貰った。

・全てのガンダム世界の技術

・全ての兵器（艦やMSとか）の操作技術の経験

・予め、転生先には俺用の隠し基地ってか拠点の用意、それと軽巡

洋艦△サイを1隻、MSではザク2のS型1機とF型を2機、予め準備して貰った。

・容姿をFFのセフィロスの若い(24位)にして貰い、身長は元の自分と同じ182、それと不老不死にして貰った。

・拠点には開発区・生産区・軍事区・居住区、それと資源を保管する保管区、金塊等の資金類を保管する金庫区、後は秘密の区の全部で7つの区だ。

…まあ、他にもあるが今言つならこんな感じ？

後、さっき言つた先に転生した奴の提案で八口の提案を貰った。

実際に見たらこれは使えるチートだったから断らなかつたぜ！

それじゃあ、少しは頑張つて来るかな？

- 第1話 -

…ポコっ…

何かの施設の様な部屋に、赤ん坊が入った容器があった。その容器には液体が満たされ、赤ん坊はその液体の中で呼吸器見たいな装置を付けて浮かんでいた。

容器が設置されている機械は別の機械とコードで繋がっている。

暫く時間が経つと赤ん坊がうつすらと眼を開ける。

(…どうやら転生は完了したようだな、しかしこれは?)

赤ん坊　に生まれ変わった自分の姿にいぶかしむ。

(さて、今は何年だ? 赤ん坊なのは仕方ないが動けないな)

そんな事を考えていると機械から音が鳴り始める。

コポコポと音を出しながら液体が排出されているらしく、それに合わせて自分の体も容器の底に降りてゆく。

そして容器の底につき、中の液体が無くなる辺りで誰かが入ってきたようだ。

(…人がいる?)

自分の願いを考えると人はいない筈…と考えていると、容器の蓋の部分と思われる場所が開く。

・カシユッ・

そして誰かと思われる存在に容器から取り出される。

(あゝ、成る程な)

自分が人と思つたのは人では無かった。

それに抱かれる様に近付くと、それは神に出した条件の1つ、「ハ口」だった。

自分を抱いているハ口の色は白で、気付かなかったが黒も居た様だ。

赤ん坊の状態ではボヤけて見えて、近付かないと良く見えないのだ。

「あゝ…ブ？あばばば？」

ハ口に色々と聞こえようとしたが上手く話せない。

赤ん坊らしい事しか口から出ないのだ。

どうしようかと考えていると、ハ口達が自分を何処かに連れて行く様だ。

(…さて、どうなる事かな?)

そんな事を思いながらハ口に抱かれつつ移動する。

- 第2話 -

あれから暫く経ち4歳となった。

あれから白と黒の八口達に世話や教育をされながら生活をしていて、最近になって漸く時期が分かった。

今は宇宙世紀0055年だった。

それと白と黒の八口以外にも何種類かの八口達がいる事が分かった。

てつきりあの2体だけと思っていたからビックリした。

それぞれの色には役割が決まっているが、今は良いか、と考えて放置している。

とは言っても方針が決まる迄は資源採掘等を白と黒の八口以外の八口達に命じて置いた。

7歳になる年である宇宙世紀0062年2月、俺は地球圏の状態に改めて辟易していた。

地球連邦の腐敗は知ってはいたが改めて調べるとその酷さに胸焼けを起こす。

最初に行ったのは地球連邦関係の場所にハッキングをしたのだ。

そこで得た情報によると、連邦政府の高官の汚職や低所得者を主にコロニー住居者への重税、社会的に高い地位に居る人への賄賂による宇宙への移住の黙認…等々だ。

酷い場合には連邦政府は軍を派遣して抵抗する人達を犯罪者として

無理矢理に宇宙に移住させるのだ。

そこだけならこの件はマシで、移住先が普通のコロニーじゃなく犯罪者を収容する為のコロニーだったり、その際に見た目が綺麗な若い子は…高官等の玩具にされる始末だ、しかも飽きたり子供が出来たらコロニーや犯罪者コロニーにポイツと捨てる様に、何も持たせずに移住させるのだ。

それと色々調べ続けて分かった事だが、各コロニー群には反連邦組織があるらしい。

らしいってのは俺は知らなかったからだ。

正直、原作ではそこまで詳しいのは語られなかったし、メインの話は「木馬」柄みだったからな。

さて、そういえば俺の居る基地の場所を言って無かったな。

俺の居る基地は地球と木星の間にある宇宙ゴミで出来た場所の中の1つに、廃棄されたコロニーの様な感じである。

見た目は廃棄されたコロニーだけど、実際は空気や食糧生産区も有るし、他にも色々と施設つてか区があるから「小さなコロニー要塞」に相応しい仕様だ。

勿論、武装だつてしてある。

さて、そんな俺だがこの4年間で色々と準備は出来ていた。

と言っても万が一にバレた時の為に自衛用のMSを少しばかり生産して、艦を3つ生産しただけだ。

まあ、まだ暫くは使えないがね。

MSはジオン共和国が公国に変わってから出るから、暫くは使えない。

そしてこの宙域に基地を用意したのは、俺が手に入れたい場所が地球圏じゃなく木星圏だからだ。

木星圏は地球圏に比べたら確かに弱い。

だけど、他の場所に比べたら魅力ってか旨味は大きい。

実際、かなりの人間が暮らせる領土になるだろう。

それより、今は方針が決まった。

サイド4「ムーア」のある人物に目を付けた。

彼は小さいながら反連邦組織を率いていて、他の組織と一緒にサイド4の独立運動ってか抵抗をしている人物だ。

連邦政府も危険人物と見なしているが、宇宙の事に興味が無いのかあまり積極的では無い。

だから今の内に接触して、俺の好みに合えば組織のボスとして確立しようと考えている。

後は上手く、彗星やその妹、巨星や白狼も欲しいが…まあ、無理だろうな。

欲しい人物は何人かいるが、今は確実に自分の勢力を密かに強化しつつ、他の隠れ蓑が欲しい。

その為の反連邦組織の設立ってか支援だ。

それに勢力が複数あれば、下手に戦争は起きないだろうからな。

…結局、仮初めの平和の為に、人は睨み合わなければいけないのだ。

後は宇宙だけじゃなく、地球にも独立した勢力を2・3は作りたくな…。

「その為には色々と準備を急ぐか」

俺の物語は始まったばかりだ！

・第3話・

・宇宙世紀0063年8月・

この日、俺は基地にいるハ口達に色々と指示を出して地球圏へと向かった。

当初に予定していた民間の輸送船を装った宇宙輸送船「ミニミック」に沢山の資源を積んでサイド4へ進路を執る。

幾日かすると予定通りにサイド4のコロニーの1つに寄港した。

入った当初は艦の責任者兼所有者が7歳の若者と言う事に疑問を抱かれ、地球連邦の軍人に危うく積み荷の金塊を奪われそうになったが、艦の所有権や艦の資格の証明書を見せると名残惜しそうに引いた。

「やっぱり此処も腐っているか」

凡そ子供らしからぬ口調で軍人が消えて行った方を見る。

腐敗は知っていたが調べて、そして今のあの物欲しそうで人を見下した目が気に入らない。

「さて、早速調べるか？」

俺はそのままコロニーの中にある街を目指した。

受付やら色々な手続きを終えて手配していた車に乗って、運転手に街へ行く様に言ってやって来た。

街は思っていたよりも活気があり、小さな子供同士が遊んだり学生らしきカップルが喫茶店らしき店で話し合っていたりしている様子が見える。

「どうだい？此処も結構、いい街だろ？」

俺が外の景色を眺めていると、不意に一時的に雇った運転手が話しかけて来た。

「はい、僕がいた所よりも活気等があって羨ましいです」

「ははっ！そうだろそうだろ？俺はこのコロニーで生まれ育ったから他のコロニーはちゃんとは知らないが、それでもこのコロニーが大好きだ！」

その後も運転手とはどの店が旨いとか子供には飲むのは早いとかの会話を続ける。

「そういえば、この後は何処に行くんだい？」

「この後は大学に寄って、シック教授って方に勉強を見て貰う予定です」

へえ…しっかりしてるんだな、と運転手に関心されながらも車は大学に近いて行く。

「正面に付けるから待っててな」

運転手はそのまま正面口の前に車を停める。

「ありがとうございます」

「良いってよ、仕事だかな！終わるまでは駐車場に居るから、終わったら悪いんだが駐車場に来て貰えるかい？」

「分かりました」

それじゃあ…と、運転手は駐車場に向かって車を走らせた。俺はそれを見送ると大学に入っていく。

正面口に入ってすぐ右側に受付があり、そこで女の人に質問される。

「こんにちは、坊や。此処には何の用で来たのかな？」

「あの、シツク教授って方に会いたいんですが…」

「あら？教授とはどんなご関係？教授は忙しい方だから用が無いのなら会わせちゃ駄目なの」

「えっ…と、シツク教授に今日は勉強を見て貰える約束で来たんですけど…」

「残念な坊や、此処は大学だから坊やの先生はいないわよ？さあ、分かったら帰りなさい！」

正面口を指差しながら女性が帰る様に言う。

(おかしいな？確かに今日、会う様に手配したのだが…)

そう考えていると受付の内線が鳴る。

女性がシツシツと手を振りながら内線を取り会話を始めた。

仕方ないので正面口から出て、駐車場に向かおうと思ったたら女性に呼び止められた。

どうやら今頃になって教授から連絡が来たらしい。

教授のいる場所と入る許可を貰って教授の待つ場所へと向かう。

教授は3階にある個室を教授用に貸してあるらしく、そこで待っているとの事。

暫く階段を登ったりしながら歩くと、直ぐに教授の居る部屋に着く。ノックをすると部屋から返事が来たので入る。

「やあ、いらっしやい。今日は勉強を見てあげる約束だったね」

教授が約束の話を出してくる。

そして紅茶を俺と教授の分を用意して一口飲むと、

「所で君は誰何だい？」

教授が此方を睨む様に質問して来た。

- 第4話 -

教授の質問に対して暫く無言になりながら紅茶を飲む。

その間も教授の睨みは弱まる事は無く、寧ろ強くなっていく。

「もう1度だけ聞く。君は誰何だ？そして何故あの事を知っている？」

教授の質問に暫く思案する様に片手を顎に当てて考える風を装おう。そして少し考えたふりをしながら教授を見て

「まどろっこしいのは嫌いなので単刀直入に言いましょう。貴方が隠し持ってたパソコンにハッキングして、連絡を入れたのは私だ、目的は貴方と貴方が率いる組織が欲しい」

静かに、しかしはつきりと次々と最低限の事だけを教授に伝えた。教授は子供だと思っていた相手がいきなり態度が変わり、更に色々な事を言われた為か、少し硬直した。

しかし流石に反連邦組織を率いるだけあり、直ぐに復活して此方に質問をして来た。

「…君は何者だ？それにハッキングだと？一体、どうやって？」

「私の正体については秘密だが、名前位は名乗ろう。ブラッド・バレット、それが私の名前だ。ハッキングについては連邦関係をハッキングしていたら貴方の名前も犯罪者リストにあったから、そのまま調べただけだ」

「なっ…！」

ブラッドの言葉にシック教授が驚く。
それは仕方ないだろう、何故なら現状に置いて圧倒的な勢力を誇る地球連邦にハッキング等…。
幾ら腐敗して多少は緩くなったとしても、今だにその力は確かな物なのだ。
それをたかが7歳の子供が簡単に言った事やその様子から嘘とは言えない事に驚く。

「信じられないならこれを」

ブラッドがシック教授に何枚かの紙の束を渡す。
浮けとつて内容を見たシック教授の表情が直ぐに青くなって行く。

内容はシック教授を含めた各コロニーに居る、地球連邦が密かに作成した犯罪者リストやその組織、活動拠点が記載されていた。

「これは…」

「それは私がハッキングして手に入れた情報を纏めた物です。それと此方を」

今度は別の紙をシック教授に渡す。

その内容も又、驚く物だった。

内容はサイド1やサイド4があるL5とL1、ラグラージュポイントL2、月の間にあるデブリ帯に廃棄された資源採掘基地から作った秘密拠点、更にはサイド4独立の為の計画や地球連邦だけでなくジオンの情報も入っていた。

「…これは確かな情報なのだろうか？」

「ええ、少なくともハッキングした時点では本物ですよ？ただ時間は常に動いてますから、多少は変わってるかも知れませんが」

シック教授の質問にサラッと答える。

シック教授は少し考えてから。

「この計画に賛同しなかったら？」

「別に貴方に何かするつもりはありませんよ？その代わり、他のサイドで新しい人を探すだけですから」

何でも無い様に答えるブラッド、暫くシック教授は考えこんでいたが、ブラッドの方に顔を向ける。

「…分かった、賛同しよう。」

「ありがとうございます。」

「ただ、他の皆を纏めるのに1週間程の時間が欲しい」

「構いません、寧ろ私が思ったより早くて助かります。」

ブラッドは答えながら残った紅茶を飲み干す。

「しかし…何故、我々、と言うより私に協力を？」

飲み干したのを確認してからシック教授が疑問を聞く。

「別に難しい事じゃありませんよ？そのリストに書いてあるのを頼りに、自分なりに調べて、信頼出来るだけの人格・能力が貴方だった…それだけです」

シック教授が何かを言おうとするが、それに…とブラッドが続ける。

「私の両親は強制的に移住をさせられました。…その後は無理に働き続けてどちらか死にました、私のは言わば、個人的な私怨ですよ」

「…そうか」

その後は多少の雑談はしつつも、2人は色々な確認を行い、別れる。

翌日、シック教授は突然、大学を辞め姿を消した。

それから5日後にサイド4のコロニーの1つで武装決起が勃発。

武装決起を起こしたグループは地球連邦軍の関係施設を次々と破壊、その後はコロニーに停めてあった地球連邦軍の戦艦や輸送船を強奪、何処かへ姿を眩ませた。

地球連邦軍はこの事態に軍を派遣、しかし犯人達を捕まえる所か、犯人の姿を捉える事が出来なかった。

後日、開かれた会見では武装決起した犯罪グループは無事に鎮圧したと発表がされた。

この会見の後、事件があったコロニーから1隻の輸送船がサイド3に向かって飛びたった。

- 第5話 -

- 宇宙世紀0068年 -

この年、宇宙に衝撃が走った。

宇宙世紀0058年にジオン共和国が独立を果たすのに貢献、そしてそのリーダーでもあったジオン・ズム・ダイクンが突然の死を迎えたのだ。

彼はコロニーへの宇宙移民が始まって半世紀以上が経ち、地球にとどまる特権を持つ人々とスペースノイドと呼ばれる宇宙移民の間で対立が深まる中、「スペースノイドからこそ新人類『ニュータイプ』[『]が生れる」と説き、地球からの自治権獲得を訴えて多くのスペースノイドから大きな支持を得た人物である。彼は地球を自然のままそつとしておくべきとする「地球聖地論^{エレスム}」と、宇宙生活で独特の視野を得た宇宙生活者の自治権確立をうたう「コントリズム」を融合した思想（後に「ジオニズム」と呼ばれる）を唱えて、サイド3で政治活動を行う。

やがてその運動はサイド3全域に広がり、宇宙世紀0058年に単独での自給自足が可能となった時点でジオン共和国の成立が宣言され、同時にジオン国防隊を設立させた。

宇宙世紀0059年、地球連邦政府はジオン共和国に経済制裁を実施し、両者の対立は深まっていった。

対立が深まった理由としては、サイド3は主な産業は製造業で地球連邦向けの輸出で潤う一方、資源は不足しており資源開発に多大な投資を行ってきた。

宇宙世紀0034年には資源枯渇による急激なインフレが発生し、翌0035年には通貨危機が発生。

0042年には工業生産力がピーク時から4割低下し、混乱した国

民が強い指導者を求めた。

そこにダイクンを筆頭にザビ家等の活躍で奇跡的に経済は持ち直すが国民の資源枯渇に対する恐怖は、以後、サイド3に住む人々にずっと根付く事となる。

そしてダイクン亡き後に後を継いだのは、ダイクンの側近であったデギン・ソド・ザビであった。

この事にダイクン派と呼ばれるグループが抗議、その抗議は日に日に増し、内乱かと思われる状況の中、突然ダイクン派のグループがザビ家やザビ派と和解、その翌0069年にダイクンの妻であるアストライアが亡き夫の後事を任せると発表、更にダイクン派の筆頭だったジンバ・ラルがデギンの指示を表明した。

その後、デギンは着々と政治体制を整える。

そして翌0070年に共和国から公国に国名を変更、同時に民主制から君主制に変更し自らは「公王」に即位した。

その間にアストライアが自分の子供2人、そしてジンバやその息子ランバ等のダイクン派の何名かを連れて他に移住した。

公国となったジオンは同年8月に地球連邦と独立の為の話し合いが月にて行われ、色々な取り決めを行い、地球連邦政府はジオン公国のサイド3の全自治権を認め、名実共に独立を果たしたのである。

更に、ジオン公国は地球連邦政府と交渉を続け、地球から見ても月の裏側の広い範囲、実に月の40%にあたる場所をジオン公国の領土として領土権を承認、ジオン公国は月に資源採掘基地の建設を開始した。

尚、余談ではあるがジオンが公国になった日にカロウィン・シックに似た姿をサイド3で見たと言う話が囁かれた。

- 第6話 -

- 宇宙世紀0072年5月 -

サイド4とサイド3の中間エリアにあるデブリ帯付近に、ジオン公国の艦隊が集結していた。

「閣下、本当に奴等は現れるのでしょうか？」

艦隊にある1つの艦で1人の男が自分の乗る船の閣下と読んだ男に疑問をぶつける。

疑問をぶつけられた - 通常の成人男性よりも巨体な - 男は、部下である男を見ずにモニターを見たまま答える。

「…分かん。しかし兄貴の命令だ、上手くやるしかあるまい」

「了解しました、ドズル閣下！」

ドズルと呼ばれた男は、艦長や通信手らに指示を出しモニターを見つめる。

ドズル…名前はドズル・ザビと言い、デギンの三男である。

彼は長兄であるギレンからある物を積んだ輸送船を含む、艦隊の指揮を任されてこのエリアにまで来たのだ。

ただ、彼自身は今回の指示は不服だった。

何故なら輸送船の積み荷はジオン公国の新兵器であるからだ。

それを今から会う相手側に秘密裏に譲渡する交渉だからだ。

せめての救いは積み荷の全部がそれじゃなく、一部とは言え新兵器

の競合に落ちた兵器も含む事だろうか。

「目標地点へ到着しました！」

不意に通信手から報告が入る。

「よし、艦隊はこの場で停止！交渉役は相手側が現れたら向かえ
！」

ドズルの言葉に艦長が指示を出し、通信手は他の艦にその指示を伝える。

艦隊が停まる頃、デブリ帯から数隻の艦が現れたら。
見た所、地球連邦軍の戦艦が3に輸送船が2、だ。

ただ、その船達からは地球連邦の信号は出ておらず、代わりに他の信号が出ていた。

「…閣下、例の相手の確認が取れたとの事です」

艦長がドズルに報告する。

それを聞いたドズルはすぐに相手に話し合いを申し出た。

相手はそれを了承、ドズルらジオンの指示の元、小型宇宙艇に乗って何名かが交渉の場用にした艦に乗り込んだ。

ドズルらはその様子を静かに、見守ったのだった。

「御初にお目にかかります。この度の交渉役を仰せつかりました、
コンスコンです。」

ジオン側の交渉役である男が、入って来た相手に名乗る。

「これはこれはご丁寧に、私は反連邦組織の交渉役を任されたユウキ・クリシマです」

相手側である男、ユウキもコンスコンに名乗りながら互いに握手する。

「どうぞお掛け下さい。…では早速、話し合いを始めましょう。今回、我々ジオンは貴方方と正式に…とは言っても秘密裏にですが、協力を約束しましょう。その証として我々ジオンはそちらに少数ですが、開発した新兵器の提供をしましょう！」

「ありがとうございます。我々からはそのお礼に、此方の輸送船に積んである資金・資源を僅かばかりの気持ちですが投資させて頂きたい。」

「おお！それは助かります。例え僅かでもその分、助かりますからな！」

2人はそれぞれに紙を交換し、内容を確認する。

「…互いに動くのはまだ先、ですか」

「ええ、そちらは当然ですが我々ジオンも今だに兵士達の新兵器の練度は低いですから、それと此方が以前からそちらに打診されていたツイマッド社の協力の確約した書類です」

コンスコンがユウキに別の紙を渡す。
受け取った紙の内容を確認するユウキ。

「…確かに」

「それは良かった、これで取り敢えずの話し合いは終了ですか？」

「ええ、互いに地球連邦からの鎖を断ち切りましょう！」

2人は握手をした後、別れた。

両組織の軍が別れ、ジオンの艦隊がサイド3宙域に入った頃、ユウキは自分の所属する組織の拠点に戻っていた。

時代は確かに、「史実」から曲がり始める。

- 第7話 -

- 宇宙世紀0077年 -

サイド2ハツテとサイド5リアで、同時テロが起きた。

事件の内容はそれぞれのサイドの独立運動していたグループが示し合わせ、コロニーにいた地球連邦軍のコロニー駐在軍を襲撃したのだった。

これに対して地球連邦政府は事件の早期解決を考え、軍を派遣。これに慌てたのは武装テロをした各グループだった。

それぞれは支援していた組織の指示に従い、サイド4付近のデブリ帯を宇宙港にあった地球連邦軍の宇宙船等を奪って脱出。

しかし、一部の交戦派が地球連邦の派遣した軍に向かって攻撃を開始した。

最初は奇襲の形で襲撃した交戦派の部隊が地球連邦軍の巡洋艦数隻、撃沈したが混乱から治った地球連邦軍に次々と逆に撃沈されて言った。

そして残り1隻になった交戦派が密かに連れて来ていた人質を盾に、攻撃の中止を求めた。

しかし、此処で衝撃が走ったのだ。

地球連邦軍は攻撃の中止を拒否、拒否所か何も答えずにテログループが乗る宇宙船を人質と共に撃沈したのだ。

これに対して地球連邦政府は攻撃の中止を求められた事を否定、更に地球連邦政府は人質がいた事に関しては確認が取れてないと明言、仮にいたとしても尊い必要な犠牲、と発表した。

しかし、後日に新事実が判明。

当時のテログループの掃討を命じられた艦隊の将官が、地球連邦政府の高官とのやりとりを世間に発表。

その内容は将官が高官に対して必死に攻撃中止の許可を嘆願、しかし高官はそれを否定した所かコロナー住民の人質を「宇宙ゴミ」と発言。

この発表に地球連邦に、特に政府に対して宇宙移民者の抗議が発生。だが地球連邦は黙秘を続け、宇宙居住者と地球連邦の溝が深まる一連となった。

「大変な事態になりましたな」

ユウキがポツリと呟く。

彼以外にも何人かの姿が確認出来る。

彼等はサイド4近くのデブリ帯に拠点を構え、その拠点の会議室で話し合っていた。

拠点は廃棄された資源採掘基地を改修・改装したものだが、機能や防衛力は高い。

更に周りはデブリがある為、地球連邦軍に攻められたとしても大軍の侵攻を阻む、謂わば天然の要塞の様な場所になっているのだ。

彼等は先のテログループと地球連邦の事件に関して話し合っていた。

「閣下、直ちに我々も地球連邦に攻撃を開始しよう！」

この組織で兵士達を纏める、ラトキア・ホルメと言う人物だ。

「まあ、待てラトキア。メイビン、情報は？」

閣下と呼ばれたカロウィン・シツクが聞く。

メイビンと呼ばれたメイビン・スウは立ち上がって報告する。

「はい。我々が調べた結果では今回の交戦派は回収したサイド2側の様でした。これにこり、サイド2側で回収出来たのは本来の40%程度で、サイド5側は多少は交戦派についていった分を引いて80%が回収出来た模様です」

報告が終わるとメイビンは席についた。
続いて別の男性が立ち上がる。

「報告します！この度の回収で戦力が人員面で3割、兵器等の物資面では6割強の増加となりました。」

組織の兵器等の物資面を束ねるケビン・ダックが報告を終える。
するとまたメイビンが立ち上がる。

「それに関しての報告を致します。交渉役のユウキ殿のおかげで、我々が得た他組織と交渉が成功し、組織に続々と集結しています。我々に参加しない組織に関しては、多少の資金・資源を提供する条件に用意した拠点に隠れて貰っています。詳しい事は交渉役のユウキ殿から願います」

ラトキアが頭を下げて席に座ると、ユウキが立ち上がり報告を始める。

「では私から報告します。この度、回収出来たサイド2・5の組織は以前から資金面等で援助をしていた為、比較的信用されていた為に無事、引き込みが出来ました。又、同サイドや他サイドの組織とも交渉は続けており、比率で言えば引き込んだ組織の方が多いです。ただ、引き込み無かった組織等に関しては、今回見たいな事になる懸念、更に今回の件で地球連邦の取り締まりが厳しくなった為、多少の融通をして我々が用意した拠点に移って貰いました。融通の内容はケビン殿とジョージ殿にお願いします」

「はい。物資面では各拠点に以前から我々が得た情報を元に生産した地球連邦軍と同じ宇宙戦闘機を用意した150機、簡易武装を施した民間の輸送船に偽装した輸送船を3つ、他には銃や弾薬等、以上を支援物資として提供してます。これはジオンから得た兵器類だけ残す為の、言わばリサイクル的な処分も兼ねてと、既に開発・生産がこの兵器に統一し始めたからであり、対して損はしていません」

「では次に、各拠点には援助資金として金塊を主に、約3億円分を提供してあります。これだけあれば彼等とて満足に行く活動は可能でしょう。」

ケビンに続いて、組織の財政を担当しているジョージ・ハガが報告する。

「お二方が終わりましたので、また私が報告します。各拠点はあくまでも我々の目眩まし程度になれば…と言った程度です。その為、地球連邦の宇宙拠点「ルナツー」付近に用意した拠点は多いです。彼等の大半には合図あるまで行動を待つて貰う約束は取り付けました。ただ、腕が信頼出来そうな組織に関しては地球連邦の地球、月、地球、ルナツー、ルナツー、コロニー…等を通して、地球連邦の

輸送船を襲撃して貰う約束を取り付けました」

「次は私が」

ユウキの報告の後、組織のNo.2とも言つべきロバート・ロングが立ち上がる。

「この妨害が上手く行けば、地球連邦の各施設は物資等の補給が上手くは行き渡らない為、残り少ない我々とジオンには大変、貴重な時間を稼げると共に戦力低下も狙えます。又、襲撃を担当する組織には連邦軍とは戦わない様に厳命させる様に約束を取り付けたので破ったりされない限りは大丈夫かと。それと来年の10月に、ジオンと最終確認を行う為、デブリ帯のサイド3方面口で落ち合う予定です」

「他に報告は？」

カロウインが皆に問う。

その後は報告は無かったが交戦を主張する者もいたり騒がしかったが、結局は予定通りと話が決まった。

- 第8話 -

- 宇宙世紀0078年10月 -

前年から地球やコロニーでは事件が相次いで行っていた。

まず、宇宙では地球から月やコロニー、ルナツーに向けた物資を積んだ輸送船が次々と襲われ、何処かに姿を消す事件が起きていた。更に地球では過激テロ組織が、爆破テロや銃で襲撃する事件が勃発していた。

そんな中、以前にジオンと密会したエリアで、再び密会を行う組織がいた。

片方はジオン公国から派遣された密使団。

もう片方はカロウインが率いる反連邦組織「ゴースト」の偽装船だ。

「お久しぶりですな、コンスコン少将。」

ユウキがコンスコンに挨拶する。

「何だ、もうそこまで調べたのか？」

コンスコンがそんなボヤき共取れる事を言う。

「いえいえ、先程、入り口で兵士の方が少将と読んでいたので、分かっただけですよ」

「成る程な。…後で給料カットしてやる」

そんなコンスコンに、いや兵士に多少の同情をしながら苦笑しつつ座るユウキ。

「それで…いよいよ、予定が？」

ユウキがコンスコンに聞く。

「うむ、来年の1月3日に行動を開始する予定だ。」

コンスコンがやや緊張した様子に答える。

「成る程…では我々もそれに合わせて行動を開始します」

「うむ。我々ジオンは予定では最初に月、次にルウムに…と行く予定だ。」

「私達は以前から申し立てた通り、最初に、サイド4、続いてサイド1に行動をします」

「分かった、…兼ねてから領域は決めた通りで良いんだな？」

「ええ、私達は独立が目的ですから。独立を果たした後は連邦とは停戦する予定ですが、間違ってもジオンに恩を仇で返す真似はしませんよ」

「分かっている。だからこそこうして確認をしながら、改めて約定を確実な物にしようとしているのだ」

コンスコンは自分に用意されていたコーヒーを飲む。

「そうですね。それに私達は数が少ないのでもしかしたら…」

「むう…」

コンスコンがユウキの言葉に呻く。

ジオン公国はユウキが所属する反連邦組織「ゴースト」の全体を把握していないのだ。

所詮は小さな抵抗組織にしかないだろうから、その人数だって微々たる物の筈である。

所がゴーストがジオンに新兵器の生産許可の許可に払った金額は総額数十奥は行く。

これを踏まえて考えてると、その資金力は相当な物と考えられ、一時はジオン内で侵攻してその資金・資源を奪おうと意見が上がった程だ。

だがコンスコンやドズルと言った、ゴーストの組織の一部しか見ていない者から反対の声が上がったのだ。

たった一部…。

そのたった一部だけでジオン公国軍に所属するコンスコン・ドズルは、ゴーストの力強さを感じたのだ。

正規の軍さながらの艦隊の並べや動き、組織兵の無駄の無い動きを見れば、如何に彼等が自分達ジオン公国軍と差が無い動き…否、未だにジオンは軍の人数を予定よりやや少ないのだ。

正確には数は揃っているが、艦数等の兵器の数が生産が追い付かないのだ。

「…我々は予定通り、月、そして次に君らの組織が欲しいサイド5とサイド1以外に侵攻する。」

「サイド1…ルウムはやはり？」

「うむ、連邦との決戦の場になろう」

ユウキの疑問にコンスコンは答える。

「しかし宜しいので？」

「何がだ？」

ユウキの別の疑問にコンスコンは分からないとばかりに首を少しかしげる。

「コンスコン少将がお話して下さったのは、機密事項では？」

ユウキは素直に疑問を聞く。

「…ドズル閣下と話て決めたのだ。貴君らには隠さずに話す事をな」

「それは…信頼して頂き、大変ありがたいですな！」

コンスコンの言葉にユウキが破顔した笑顔をコンスコンに向ける。

「…っと、そろそろ時間のようです、少将」

「うむ。…名残惜しいが我々も引き上げよう」

「はい、それでは近い内に会える事を！」

「うむ、我々も…ジオンも待っている！」

その後は両艦隊はエリアから各々の本拠へと戻って行った。

反攻の開幕まで、残り3ヶ月を既に切っていた。

- 第9話 -

- 宇宙世紀0079年1月3日 -

この日、ジオン公国が地球連邦に対し完全なる独立を求め、宣戦布告した。

直後にジオンは先制攻撃として月のジオン領土となつてから建設していた月面都市「グラナダ」にある宇宙基地から月の各都市・基地に侵攻を開始、瞬く間に制圧。

続いてジオンはL4地点にあるサイド2・6に奇襲を敢行。

だが各サイドに駐留している地球連邦軍に対して、潜伏していた反連邦組織が攻撃を開始、この突然の乱入…しかも地球連邦軍と同じ装備をしていた為か混乱に陥つたまま戦闘を開始した。

そして混乱している地球連邦軍にジオンが突撃の形で攻撃に加わり壊滅したのだ。

- 同年同日L5地点付近 -

今、ジオンが反連邦組織と共に地球連邦軍の駐在軍と争つてる時、L5近くのデブリ帯から、サイド1・4に向かって幾つかの艦が向かっていった。

それは反連邦組織「ゴースト」の艦隊であり、ジオンが月を制圧すると同時に地球連邦に対して、サイド独立を宣言、同時に宣戦布告を行い、侵攻を開始したのだ。

サイド1に向かう艦隊には地球連邦軍の、サイド4に向かう艦隊はジオン公国軍のが向かっていた。

詳しく言えば、S1に向かう艦隊の構成は、サラミス級巡洋艦を10隻を主力に、コロンプス級輸送艦4隻を後方支援艦に、マゼラン級戦艦1隻を旗艦とした構成だ。

対してサイド4に向かう艦隊の構成は、ムサイ級軽巡洋艦12隻を主力に、パプア級補給艦5隻を後方支援に、チベ級重巡洋艦を旗艦とした構成。

それぞれの船は見た目には違いは無いが、それぞれの補給艦にはジオンから技術を買って生産した「新兵器」が搭載されていた。

しかし、新兵器があるのと向かっている各サイドでは地球連邦軍の駐在軍が既に防衛線を張っているとの情報が入っていた。

- サイド4 侵攻軍、ムサイ級「フェンリル」 -

「…獲物が残っていれば良いが」

ムサイのブリッジで艦長席の隣に立っている男が呟いた。

見た目は190はあるう身長に、その長身に見合った筋肉質な体つき、髪は銀色で腰を少し越える長さ、顔は整った感じだが、力強く何よりも目を引くのは赤色の瞳だろう。

「どうでしょうか？サイド4の抵抗組織もかなりの勢いがあると聞きますからな」

その男に艦長席に座った男が答える。

「ニコライ、流石にそれでは我々が動く意味があるまい？」

銀色の男は艦長席に座った男・ニコライに答える。

ニコライはこの艦の艦長を努め、階級は少佐である。

「しかしブラッド大佐、正規軍とは言え後方からの奇襲ですから、流石に連邦軍でも全面的我々に集中し過ぎて致命的なダメージを受けルナツに撤退するのでは？」

「いや、サイド2・6での他組織の奇襲は既に知れ渡っているだろう。ならば我々全面に艦隊を向けたふりをして別動隊を作り、後ろに対応するなり挟み撃ちするなりして攻撃するだろうな」

ブラッドとニコライは冷静に先を話し合っていた。

ブラッドは「ブラッド・バレットはこのムサイ級軽巡洋艦の隊長であり、独立小隊「バレット小隊」を纏めている。」

「艦隊旗艦より入電！サイド4攻略艦隊はそれぞれ予定の編隊を組み、作戦行動を開始しろ！との事です」

ブリッジの通信手が艦隊旗艦からの指令を報告する。

「いよいよか……。ニコライ、艦の指揮は任せる。私は新兵器の小隊の指揮を取る」

「ハッ！…気を付けて」

ニコライの言葉に片手を振り答えながら格納庫を目指してブリッジを出る。

「総員、第一戦闘配備！本艦は第3陣の出発だが、警戒を怠るな！」

「ハッ！」

「ハッ！」

後に残ったブリッジでは慌ただしく声が飛ぶ。

「隊長！」

格納庫に着くと声がかげられる。

そちらを向くと声をかけたのもう一人、ブラッドに寄って来る。

「アーサー、カール。準備は？」

アーサー、カール…ムサイに搭載された「新兵器」の操縦者^{パイロット}。

「ハッ、問題ありません！」

「こつちも大丈夫です」

2人はブラッドに答える。

「分かった、出撃するかはまだ分からないが、何時でも出られる様にしておけ」

「ハッ！」

ブラッドの言葉に2人が答える。

2人が自分のに向かうのを確認すると、自分も向かう事にする。

- - -

どれ位の時間が経ったのだろうか？

第1陣のムサイ級3隻が出撃し、少し前に第2陣のムサイ級3隻が出撃した。

報告ではブラッドの予想と違い、連邦軍とゴーストが戦闘を開始するまで他組織は攻撃をせず、それに油断して警戒を解いた連邦軍に奇襲突撃を開始したらしく、連邦軍の後方ではかなりの大混乱らしく、此方は連携の取れない連邦軍に対して艦同士の連携を生かした攻撃で、ほぼ一方的に撃沈しているらしい。

また、サイド1に向かった艦隊ももうすぐ連邦軍の壊滅を完了しそとの事。

『隊長、第1・2陣が連邦軍の壊滅を完了したそうです』

不意にコックピットに通信が入る。

「了解した。此方の被害は？」

『はい、此方の被害は第1陣のムサイ級2隻が中破、1隻と第2陣のムサイは損傷軽微だそうです』

「そうか、他組織の様子は？」

『他組織は続々と集結。以後は我々と合流するとの事です』

ブラッドの所属する艦隊がサイド4の他組織の助力があつたとは言え、被害らしい被害も無く地球連邦軍を壊滅したのは上出来だった。更に以前はゴーストに合流を良しとしなかつた他組織は、今回の事を切っ掛けに合流するらしかった。

更に報告ではジオンの方は先程、サイド2・6の制圧を完了したとの事。

「分かつた、艦隊の方針は？」

『無傷の第2・3陣は順次、コロニーを回って支配下に治めよ、との事です』

「了解した。2人にはこのまま待機を命じる、発進出来る様にスタンバイ頼むぞ？私は一度ブリッジに戻る」

こうしてジオン、ゴーストはそれぞれ最初の目的を果たしたのだった。

- 第10話 -

- 宇宙世紀0079年1月10日 -

ゴーストはサイド1・4を支配下に治めると直ぐ様、デブリ帯の拠点から必要な防衛戦力を残して、本隊及び本拠地をサイド4に移動、変更したのである。

これに連動してゴーストはサイド1・4の再編成計画とその為の新たなタイプのコロニー建造を発表、それは従来型のコロニーを最終的には全て廃棄、そして住居用コロニー、軍用コロニー、生産コロニーの3タイプの建造を発表した。

従来型のコロニーは居住区・工場等の生産区等、幾つかあるがそれを3タイプに分けて居住区用は居住区用、軍用は軍用…とした物だ。

居住区用コロニーは内部に必要なエリアは軍エリア、政庁や空気や電気を生産する工場等、必要な物以外は基本的には近代的な街並みの街だけと言った構成。

軍用は兵器類の開発・研究用コロニー、兵器類の生産・製造用コロニー、軍が使う軍基地コロニーの3タイプ。

生産用は、民間に必要な物を研究・企画するコロニー、衣類や雑貨等の生活に必要な物を生産・製造するコロニー、そして画期的なのが今まで無かった食糧生産用コロニーの、大まかに分けて3つのコロニーだ。

食糧生産コロニー…と云うより、宇宙での食糧生産の技術は別に今もあるが、それは微々たる物だった。

しかし、このコロニーには牛・豚等の家畜の飼育用コロニー、米等の穀物や野菜・果物等を育てられるコロニー、そして合成食糧の生産コロニーだ。

合成食糧以外は分かんと思うが、合成食糧は培養した人口の肉・野菜等を合成した食糧で、味は従来の物に比べたら多少は落ちるが、それでも過酷な宇宙ではこの計画…特に食糧関連はコロニー居住者には喜ばしき事だった。

又、ゴーストは独立を正式に果たしてはいないので、今は代理政治と言つ形で統治しているがその法案等は地球連邦の頃よりも明確で信頼出来る物だった。

特、空気税を始め、税金を摂られるのは変わらないが、その料金は破格の安さに下がった。

まず、電気に関してはコロニーは太陽熱と太陽光の2種類の電力を予備電力、主電力をコロニーに原子力発電所を二基備えたが、主な電力は実際には無料と言える太陽光・熱で賄う為、3分の1に。

水道は新たに導入した技術で多少は作れる度合いが出来た為、その分を安く。

ガスは木星を往き来する木星星団や地球から入手しなければならぬ為、三割程度。

と、言つた構成で最後に空気税。

これは宇宙においては常に作らなければならない空気を無料には出来ない為、摂らざる負えないが、ガス類を買う時に同時に購入し、その購入費を抑えられる交渉が成立していた為、ある程度の値下げが出来たのだ。

これだけでもコロニーに住む居住者達からすれば、生活はグツと楽に成るし、生活が楽に成れば経済も活性化する事が見込めるからこそその踏み切りだった。

居住コロニー、軍事コロニーはゴースト主催の計画だが、生産コロニーだけはゴースト所属の人物が個人的に成した事なので、こればかりはゴーストには関係無かった。

しかし、その人物は完成したら合成食糧生産コロニーの建造予定数24基の内、半数の12基をゴーストに無条件で譲る事を公表した。これにより、将来的には宇宙で唯一共言える食糧生産コロニーとなり、自国の食糧を賄う一方で各コロニー等の宇宙拠点へ食糧面の交易が可能となる兆しが見えたのだ。

所がこの間に衝撃的な出来事が起きる。

宇宙世紀0079年1月4日にジオン公国軍がサイド2のコロニー「アイランド・イフィッシュ」を定位置から地球へ向けて移動。

そして今日、宇宙世紀0079年1月10日に地球連邦軍の防戦によって崩壊したサイド2コロニー「アイランド・イフィッシュ」の一部がオーストラリア大陸シドニーを直撃すると言う出来事が発生した。

翌日1月11日に無傷のサイド7・8が共に中立を宣言。

同時にこの事態に危機を感じたサイド6のコロニー居住者達を主にジオン公国に抗議やデモが発生。

ジオン公国はサイド6から撤退を条件にサイド6各コロニー知事への交渉を成功。

これには他コロニー勢力やゴーストへの対応回避も兼ねていると見られる。

表だってはジオン公国への抗議声明を発表したゴーストだが、14日にジオン公国にムサイ級34、パプア級12からなる艦隊を派遣。

艦隊はジオン公国軍との極秘協力戦を行うべく、ジオン本国へと向かう。

- 宇宙世紀0079年1月15日 -

ジオン本国領域ではゴーストから派遣された艦隊をサブに、サイド5「ルウム」攻略の艦隊が集結していた。

ジオンの艦隊はムサイ級が30、パプア級10、旗艦にグワジン級大型戦艦1の構成だった。

グワジン級大型戦艦はジオン艦隊の旗艦となるべく建造された艦で、ジオン公国軍の艦艇の中でも特に強力な艦である。

このジオン艦隊の指揮官はドズル・ザビであり、彼はムサイ級に搭乗して出撃する。

そして旗艦であるグワジン級「グレート・デギン」には、ジオン公国王デギン・ソド・ザビ自らが搭乗して艦隊からやや距離を取る形で後方に控える構成である。

「中々の眺めですな」

ジオン公国軍艦隊のムサイ級「ファルメル」にてラトキアが通常より広い艦長席に座る巨漢の男に話し掛ける。

「うむ、貴軍が援軍に来てくれた為、我等も全力で作戦を遂行出来る。…礼を言う」

「いえ、我々ゴーストは宇宙居住者、引いてはコロニーの独立を目

指した組織、…ならば助力するのは当然だと私は思っております！
ドズル閣下」

ドズル：ドズル・ザビ。

ザビ家の三男でジオン公国軍宇宙攻撃軍指令であり、この艦隊の総指揮を取る男で階級は中将。

かなりの長身で210mもあり、また、その体格もかなりの力強い感想を持てる巨漢の男だ。

「何、そう謙遜するな。お前程の指令になる男だ、期待している！」

ラトキア：ラトキア・ホルメ。

ゴースト宇宙攻撃軍指令であり、今回の援軍艦隊指令でもある男。

「言え、我々は自分達の理想実現の為に当たり前の行動を取っただけでありますので…」

「がっはっはっはっ！そこまで言われたら我等も作戦を益々、成功させねばならんな？」

ドズルが愉快そうにラトキアを見ながらおどける。

「いえいえ、我々も全力で作戦成功の一役を担える様に頑張りましたよっ」

「うむ、期待している！…時にこれが本当の作戦内容の入ったディスクだ、艦に戻った後はこの作戦通りに頼む！」

ドズルはラトキアに1枚のディスクを渡しながら真剣な表情で言う。

対するラトキアも飄々とした表情から真剣な表情になり頷いてから返答する。

「はい、ジオンから提供して頂いた新兵器……。その恩も含め、我々は全力で答える事を約束します！」

「ああ、頼む！」

2人が真剣に話し合っていると、作戦開始時間となる。

「それでは閣下、私も艦隊指揮の為にこれで退艦致します。」

「ああ、戦果を期待する！」

ラトキアは一礼してからブリッジを出る。

ドズルはラトキアが艦から連絡船で自艦に戻って行った報告を聞いてからジオン全艦隊に告げる。

「全ジオン艦隊に告げる。我々はこれからルウムに侵攻し、地球連邦軍を倒すのだ！」

全艦隊出撃！、と合図を送り続々とジオン艦隊がルウムに向かって出撃する。

ゴースト艦隊はそれを見送る。

ジオン艦隊が出撃してから大分時間が過ぎた頃、出撃したジオン艦隊から戦闘の直前に通信が入った。

これにより表向きはジオン本国防衛の為の援軍だったゴースト艦隊は即座に本当の計画通りに月を迂回して地球連邦軍本隊…レビル將軍率いる本隊の後方に出る形になるように出撃した。

そして地球連邦軍レビル艦隊の前後を挟む様に両艦隊は展開。

これに対して最初にジオン艦隊と交戦したティアンム中将率いる艦隊は、ジオンが着目した新技術「ミノフスキー粒子」を散布、これによりジオン艦隊・ティアンム艦隊は通信が困難となる。

ティアンム艦隊の戦略はジオン艦隊より僅かに数があるが、その数はほぼ同数である。

ただティアンム艦隊1に、レビル艦隊はティアンム艦隊の倍で2、これによりジオンは1対3、…ゴースト艦隊を入れても戦力的にやや劣るジオン公国軍は、ティアンム艦隊に全力で艦隊を向けるふりをしながらミノフスキー粒子で通信が困難になった隙を突き、敗走するふりを装い、レビル將軍率いる艦隊本隊に突撃したのだ。

-ゴースト艦隊-

「全艦隊に告ぐ、もうすぐ目標を捉える。全艦隊は予定通りに艦隊砲撃後に全機出撃せよ！」

ゴースト艦隊指令ラトキア・ホルメが全艦隊に向けて号令を発する。

「各艦は予定通りに順次、ミノフスキー粒子を振り撒きながら前進
！」

ゴースト艦隊の各艦が次々と動き出す。

「ブラッド大佐、我が艦も出撃します」

「ああ、艦の指揮は任せる。私も出撃体制に入る」

「ハッ！」

ブラッドはブリッジを出て格納庫へと向かう。

途中ですれ違う乗組員に敬礼をしつつ格納庫へと着くと直ぐ様、他2人が近付いて来る。

「隊長！」

「アーサー、準備は？」

「隊長も含め、整備は完了して何時でも出れます！」

「隊長、装備は？」

「予定通りだ、私は対戦闘機メインの装備、お前達は対艦装備で出る。」

「ハッ！」

「了解しました！」

アーサー、カールがブラッドに敬礼をする。ブラッドが頷くと2人は自分の分に乗る。

「奴とも会えるか？…フっ、だとしたらお手並み拝見と行こうか」

ブリッドはそう弦いてから自分のに乗った。

- 第11話 -

ゴースト艦隊がレビル艦隊の後方から迫るその時、ジオン艦隊もまたレビル艦隊の前方から迫っていた。

そして突撃の襲撃、しかも前方にだけ注意が行っていたレビル艦隊は前後からの攻撃を許してしまうのだった。

『通信手から各パイロットへ、各艦からの砲撃が終了しました！順次出撃して下さい！』

待機していたブラッド達に通信が入る。

「分かった、アーサー、カール。私が最初に出るからアーサー、カールの順に後に続け！」

「ハッ！」

「了解！」

ブラッドは返事を聞くと自分が乗る機体、「人型機動兵器」…MSモビルスーツである「ザク2S型」をカタパルトに動かす。

「ザク2、ブラッド・バレット、出る！」

その声と共に急激な勢いでザク2がムサイから発射される。

「混乱していても其処は本職、流石に対応は早いか…！」

ブラッドが出撃して最初に目に入ったのは、後方に位置する地球連邦軍の戦艦サラミス級がゴースト艦隊に方向展開している動きと次々にコロンプス級から出撃して来る地球連邦軍の宇宙戦闘機「セイバーフィッシュ」、そして味方のMS達だった。

「隊長」

通信が入りザク2のカメラであるモノアイを後ろに向けると、アール、カールが後ろに続いていた。

「私は主に戦闘機を相手にするから、2人は戦艦を主に狙ってくれ」

「ハッ！」

ブラッドはモノアイを動かしながら状況を見る。

戦闘機はサラミス級や気付かなかったがマゼラン級も数隻加えて支援砲撃を受けながら此方の艦隊に攻撃を仕掛けて来る。

味方MSはその攻撃を回避しながら次々と武装である銃やバスターカで戦闘機を撃ち落としながら戦艦へと攻撃していた。

それを確認したブラッドは自分達の方へ向かって来た戦闘機3機に目標を付け、接近しながら自身の機体の武器である通称「ザク・マシンガン」を撃つ。3機は上方から撃たれた弾丸を避けきれずに連続で爆発する。

「いやあ、流石ですね！」

カールから近距離用回線で通信が入る。

ブラッドはデブリ帯の秘蔵訓練エリアで訓練した初期パイロット候補生の中で主席の成績を出した程だ。

そんなブラッドを含めトップ10以内のパイロットにはMSのパイソナルカラーやカスタムを許されていた。

ブラッドは黒をパイソナルカラーとしていて、搭乗するMSや戦艦は黒にしていた。

「流石は”虹”のリーダーだけあります！」

虹：初期MSパイロット候補生のトップ10以内の1〜7位から組まれた教官隊。

ブラッドの黒の他は、白、赤、青、緑、黄、紫の七色で組まれた為、レインボウ・エリート虹と呼ばれた。

「つまらん話は止せ。それよりも来るぞ！」

前方から新たに戦闘機が11機、向かって来ていた。

「…甘い！」

前方にいた戦闘機4機から機首の4基ある25mm機関砲を撃たれるが回避、返しに2機に向かってマシンガンを放つ。

回避が間に合わなかった2機は直撃し爆発した。

「…つとお、中々やるな！」

残った2機が仲間が落とされた事に動揺したのか、動きが鈍くなった所を落とそうとマシンガンを向けたが1機を落とした所で他の戦

闘機に邪魔された。

ブラッドは戦闘機から放たれたミサイルをかわし様に1機、その近くにいた戦闘機が爆発に巻き込まれ誘爆した。

「2機、撃墜！」

「此方は1機撃墜！」

アーサーとカールも順調に落としているらしく、ブラッドも次々と撃ち落としていく。

11機いた戦闘機を全て落とすと、ブラッド達はそのままサラミス級3隻とコロンプス級2隻いる場所に向かった。

「アーサー、カール。最初に戦艦を落とすぞ！輸送艦は後だ！」

「了解！」

会話が終わると同時に戦艦からミサイルや機銃が撃たれる。

3機はそれぞれ回避運動しながら接近し、ブラッドはマシンガンでブリッジを撃ち抜き、アーサー、カールはバスターカを直撃させ、撃墜した。

「つしゃ！戦艦撃墜！」

「私も”ブリッジ”に直撃させ、撃墜！」

カールに対抗したのか、当てた場所を強調しながらアーサーが報告。それに苦笑しながらバレットは指示を出す。

「輸送艦から戦闘機数機の出撃を確認した。戦闘機を相手にするからお前達は先に母艦を落としてやれ！」

言うやブラッドは機体のブースターを噴かしながらジグザグに動きながら接近しつつマシンガンを撃つ。

2隻の輸送艦から出てきた戦闘機は片方3機づつの計6機。

その内片方の戦闘機3機の内2機を撃墜したが、回避した1機は動きがこれまでよりも格段に違い、撃墜出来なかった。

「隊長機、か？」

ブラッドはその動きから隊長機と考え、先に落とせそうなのから狙った。

もう片方の戦闘機達に狙いを定めマシンガンを放つ。

回避が間に合わず1機は直撃し爆発、1機は右翼に被弾した為か、もう1機にぶつかりながら回避、最後の1機はそれで回避出来た物の、頭を打ったのか動きが鈍かった。

その戦闘機に別方向からの攻撃が直撃し爆発した。

ブラッドがその方向を見るとアーサー、カールが輸送艦を落として此方へ来ていた。

「アーサー、カール。1機は隊長機だから油断するな！もう1機はお疲れの様だから早々に休ませるぞ！」

ブラッドは先程隊長機と思った方に牽制の意味を込めマシンガンを放つ。

それは回避されたが、もう1機はアーサーに落とされた。

「隊長、此方は休ませました！」

「よし、アーサーはそのまま相手をバスター力で撃て、俺は回避した奴の動きを止める、そこをカールは落とせ！」

「了解！」

「了解！」

返事を受けた後、アーサーの攻撃を上方に避けた戦闘機を止める為マシンガンを放つ、他方向に回避しようとする動きが鈍くなった隙をカールが撃ち落とした。

そして隊長機を落とした所でブラッドは周りの様子に気付く。

「連邦が…後退、いや撤退してるのか？」

見ると地球連邦軍の艦隊が何処かに移動しようとしていた。どうやらマゼラン級1隻を旗艦にサラミス級6、コロンプス級2、それとコロンプス級に搭載されているだろう戦闘機だろう。

「…アーサー、カール。お相手はお帰りの様だからたっぷりとお土産を送れ！」

バレットは一瞬、追撃するか考えたが追撃する事にした。

このルウムの戦いは当初は援軍のゴーストを加えても数で劣るジオ

ンの敗北を誰も疑わなかったが、ジオンは奇策と新兵器であるMS、そしてMSの運用を前提としたミノフスキー粒子によって、逆に地球連邦軍レビル艦隊をほぼ壊滅に追い込んだ。

この戦いで華々しい功績を上げたジオン軍人の1人は「赤い彗星」と呼ばれ、ゴーストのバレットは「黒狼」と呼ばれ恐れられた。又、虹の他メンバーもそれぞれ戦果を挙げ異名で呼ばれる様になる。

時に宇宙世紀0079年1月15日～16日の出来事だった。

- 第12話 -

宇宙世紀0079年1月17日にジオンが撤退していたサイド6が中立宣言した。

先のルウムの戦いにおいてジオン公国軍は驚くべき戦果を挙げた。それは奇襲の形で前方からジオンの攻撃によって撃沈したマゼラン級からランチ（連絡艇）で脱出を試みたレビル將軍が黒い三連星に捕捉され、捕虜になっていたのである。

これにおいてジオン公国は捕虜となったレビル將軍の姿を映した、プロパンダ放送で地球圏に公表。

その後宇宙世紀0079年1月28日にジオン公国政府はサイド6を通し地球連邦政府に対して休戦条約の締結を打診。

そして宇宙世紀0079年1月31日にジオン公国政府と地球連邦政府は休戦条約の交渉に臨むが、調印直前に捕まっている筈のレビル將軍による放送が行われた。

「諸君、私は先のルウムにおいてジオンに捕虜となり捕まっていた。そして私はこの目でジオンの内情を見て来た。彼等は我々よりも圧倒的に兵が折らず、我々も苦しいが彼等も苦しい思いをしている。諸君、私は此処にジオンに兵無し！…と伝える！」

レビル將軍がジオン本国を脱出し、ジオン公国軍の内情を暴露する「ジオンに兵なし」演説を実施。

これにより連邦政府は継戦に傾き南極条約は休戦条約から軍事条約

に変更、ジオン公国軍は地球侵攻作戦を開始するのだった。

宇宙世紀0079年2月1日にジオン公国軍は地球方面軍設立を公表。

そして宇宙世紀0079年2月7日にジオン公国軍は地球侵攻作戦を本格的に発動。

同時にゴーストも地球侵攻作戦を開始する事を決定した。

宇宙世紀0079年3月1日にジオン公国軍は第1次降下作戦を開始。

バイコヌール宇宙基地に宇宙基地制圧隊が降下。

宇宙世紀0079年3月4日にジオン公国軍はオデッサに、マ・クベを中心とした公国軍資源発掘隊が降下。

同日、ゴーストはオーストラリアに攻撃軍を降下。

宇宙世紀0079年3月11日、ジオン公国軍は第2次降下作戦にてキャリアフォルニアベースを無血制圧。

宇宙世紀0079年3月18日、ジオン公国軍は第3次降下作戦にてニューギニアに降下。

東南アジアは制圧仕切れず、戦闘継続状態となる。

- オーストラリア -

オーストラリアの地を黒色のギャロップに乗って「バレット小隊」が移動していた。

ギャロップ：機体下のホバークラフトと左右の強力な外装ポッド式ジェットエンジンにより、巨体さに似合わぬスピードで砂漠等の陸路を駆け回る高速陸戦艇である。

宇宙世紀0079年3月20日にゴースト地球攻撃軍はオーストラ

リア南東部の宇宙基地に降下、以後は制圧したその場所及び基地をゴースト地球攻撃軍本拠地としてオーストラリア侵攻を開始していた。

本来はオセアニアに降下する筈が予定降下地より外れて降下してしまった為、オーストラリアでの勢力を拡げながら中央部を目指して独立小隊を主軸に侵攻作戦を開始していた。

「ニコライ、様子は？」

「今の所は敵の影は無いですな」

ギャロップのブリッジでブラッドとニコライが会話していた。

「大佐、今回の作戦はどうするんで？」

「今回は我々ゴースト勢力圏より北にある街を制圧下に治めようと思っっている。」

「はあ…ですが北方面を任された我々は今の所、他の小隊よりも侵攻が遅れてますが？」

「フっ…それでも今は東は睨み合いになったからそれ以上は無理だろう。それに南は元々侵攻するエリアが少なく、完了した今は基地防衛に専念だ。北西は支援する攻撃軍本隊と折り合いが悪く、侵攻は予定の3割で停止中だ。その間に我々は確実に勢力を拡げれば良い。」

「そうですね、我々はゆっくりですが支援部隊に無茶等はさせてませんから関係は良い状態ですし」

「そうだ。それにこの作戦は我々小隊がメインだ、支援部隊は馬鹿にされんから面子も保てるしな」

「ですな、まあ…我々の支援部隊はそういうのは気にせんでしょ
うが」

「全くだ」

バレット小隊は先のオーストラリア降下時からオーストラリアに赴任している。

既に1カ月以上見ている風景に飽きて来てもいた。

「しかし暇ですな」

「何、もうすぐ目標の街近くに着くだろ」

そんな会話をしている時だった。

「艦長！目標の街方角から航空機3機の飛び立ちを確認！…此方に向かって来てます！」

ブリッジの索敵手を務める女性から報告が入る。

「はあ…敵さんも必死だな。マリア、会敵予測時間は？」

「…数分後に接触すると見られます！」

マリアと呼ばれた小隊唯一の女性が答える。

歳は19だがその技能はかなり高く、小隊のアイドル的存在でもあ

る。

「ご苦労、…隊長！」

ニコライはマリアからの報告を聞くとブラッドに向く。

「分かっている。偵察かも知れないが攻撃かも知れん、MSで出る。」

「お願いします」

「ああ、整備兵には私の装備はマシンガン主体と伝えてくれ」

バレットはニコライに告げるとブリッジから格納庫へ向かった。

格納庫へ着くと既にアーサーとカールは自分のMSに乗り、出撃可能となっていた。

ブラッドはそれを確認すると自分のMS「ザク2J型」に乗る。

他の2人も同じ機体だが、ブラッドのザクには頭に隊長機を表す角が付いている。

「…アーサー、カール。敵は航空機が3だが、偵察機か戦闘機かは不明だ」

「隊長、敵さんには熱い歓迎をしてみよう！」

「良いねえ！敵に花火を見舞いしてやろうぜ！」

バレットの報告に以前バレットが言った冗談を使ってアーサーとカ

ールが答える。

「そうだな、まあ、どのみち敵には落ちて貰うがな」

そう言つて箱状の艦体前方にあるMSが発進可能なハッチに向かつて機体を動かす、ハッチは格納庫に繋がっている。

「ザク2、ブラッド・バレット、出るぞ！」

ブラッドはハッチが開くと直ぐ様出撃して上空に銃を向ける。

「マリア、敵の様子は？」

「間もなく視界に入る筈です」

マリアからの返事の後、空を見ていると何かがブラッド達の方に飛んできた。

「隊長、敵さんが来ましたね」

後から出撃したカールが目標を確認しながらブラッドに言う。
アーサーは銃を構えながら目標に狙いを定めているようだ。

「アーサーはこの場で待機して艦に接近した航空機を落とせ。カールは50メートル先に移動、その場で航空機を落とせ、私はその間を担当する。」

「了解！」

「了解つと、じゃあ早速、行きますわ！」

アーサー、カールが返事をし、カールは返事と同時に目的地へと向かって移動、ブラッドもまた中間地を目指して後ろ側を歩く。

航空機：は確認出来た限りでは3機共、戦闘機「セイバー・フィッシュ」の様だ。

- セイバー・フィッシュは装備の変更で宇宙・地球共に使用可能な機で、地球連邦軍の空戦の主力だ -

1) 報告

あーあー

マイクテスト、マイクテスト…

皆様、おはよう・こんにちは・こんばんは…

今後の活動に関して
活動報告にて報告があります！

大変申し訳ないのですが
活動報告の通りなので
皆様のご理解等をお願い致します！

尚

このお知らせは
再開の時に消しますので

このお知らせが無い
を再開の合図にさせて頂きます！

また

何か不肖ながらこの私にご要望等ありましたら
ドシドシお願い致します

ご感想・ご指摘・ご参考と捉え、励みにさせていただきます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6463u/>

-歴史の改編者-

2011年12月18日07時45分発行